

る大陸文化輸入の唯一の門戸であつた長崎の支那貿易史に關し、平易に叙べた概説書が産れてほしいものであると思ふ。(菊判七一九頁、挿繪二二、昭和十三年十一月、長崎市役所發行)(外山軍治)

津島町史

愛知縣海部郡津島町編

近時新しき國學として、郷土史民俗學の研究の盛になつたことは、漣波に歸せんとする僻處の地方に於ける貴重なる資料を發見紹介せる、ことに依り、國史の研究上貢獻するところ大なるものがある。此度愛知縣津島町では、名古屋地方郷土史の權威文學士若山善三郎氏に町史編纂を囑託し、爰に一千頁に近き大冊の完成を見るに至つたのは、慶賀に耐へぬ次第である。若山氏は嘗て神宮皇學館に於いて國史學古文書學を講ぜられ、且又大正五年四月名古屋温故會を設立し、爾來二十餘年名古屋を中心とする中部日本社の社史蹟の見學及び資料寫眞・編纂物の刊行等に盡力せられ當地方史料開發・研究等に寄與せる、所大なるものがある。氏は曩に一宮市より同市史編纂を委囑され、近くは熱田神宮宮廳より同神宮史編纂主任を拜命され、兩者共に進捗中のところ、今又津島町史編纂に従事せられたるは、眞に適材を得たものである。本書は篇を分つこと十三、章を重ねること七十七、乃ち總記・沿革・行政・司法及警備・教育・兵事・産業・交通・社寺教會・名蹟・人物・文藝・風俗の各篇に分載して、濃尾平原南部に於け

る名邑の全貌をよく描出されてある。殊に當町は王朝以來の古社として午頭天王と稱せられ、武神として室町將軍織田豊臣兩氏尾張徳川家等武家の崇敬も厚く、又疫病禳除の靈驗ありとして民間の信仰も深き、國幣小社津島神社の鎮座地として、其の赫々たる御神威を顯彰し奉るべき幾多の事蹟、則ち社殿・神階・社格・遷宮・崇敬・社領・社家・齋末社・神宮寺・諸神事・祭典等百數十頁に互つて説かれてあり、神祇史上考究すべき題目の多くを提供してゐる。則ち舊曆六月十四・五日に行はれる世に名高き津島祭は天下の奇祭として知られ、且又御神事中御屋開神事・春秋縣田遊神事・神葦流神事等は何れも古代祭祀の流を汲むもので、延喜式内社には屬せぬが、其の御由緒の悠久の古に存するを證するものである。

又當町は延喜式に見ゆる馬津驛の近傍にあり、王朝末よりは之に代り、津島渡として海道記・東國紀行等にも表はれ、海道の要津として土地肥沃四通發達の地に在り、且又大社の門前町としても發達し、彼の浪合記に見ゆる、後醍醐天皇の御孫伊良親王が信濃浪合に敗れ給ひ、御子良王が最後の據點を遠く津島奴野城に求め給ひ、津島の四家七黨に擁せられて、永享頃まで四隣を壓して宮方の餘勢を保つてゐられたと傳へらるゝのは、現に津島舊社家の殆どが南朝の末と稱し、又町内に良玉の遺跡と傳ふるもの數ヶ處も存し、且又此の天府の地なる點をを思ひ合すれば一篇の傳説とのみ片付けられぬ或る示唆を與へるであらう。

斯く地理的に惠まれたる津島の地は武家の崇敬民間の信仰によ

り獨自の發展をなし、戰國時代には此の信仰により保護せられたる局外中立の安全地帯を形成し、遠近よりの參詣者も雲集して賑を極め、富豪も多く質商人も居住せしことが太閤記にも見え、當時經濟上優越の地位にあつたことが察せられる。而して明治以後に於いては尾西毛織物の一中心地として前途多き工業都市を約束してゐることである。

尙一言すべきは津島神社々家を中心とする國學殊に和歌の發達である、尾張藩主より豊かなる社領を受けて風流韻事を友とする祠官中其の代表的なるは歌人として氷室長翁、禪道家として眞野時綱の名を擧ぐべきであらう。

以上は同町史の片鱗を窺つたに過ぎぬ。只其の望蜀としては、津島神社を中心とする民間信仰及び全國的に殊に關東に多く弘れる津島信仰と講社との關係又全體として今少しく根本史料を増加されたきこと、及び町史年表・索引を附載されたきことでもである。

しかし之は其の跋文にある如く、僅々一ヶ年の歲月により、此史の大冊を完成された若山氏の努力に對しては感謝すべきである。(菊判、本文九一四頁、圖版七三、附録地圖二、昭和十三年十二月、愛知縣海部郡津島町役場發行、頒價四圓)(田中善一)

## 石造美術

川勝政太郎著

昭和十年同じ著者によつて「石造美術概説」といふ珍らしい本が

出版された事があつた。それは石造美術の開拓者であり、且つパイロットである著者が、他の追従者のために入門手引の書物として世に提供せられたものであつたが、今回別上梓された「石造美術」は、今著の後に於いて著者が新に研究を加へられたものを補ふと共に、新なる研究分野を指されたもので、此の方面唯一の好書たる事は言ふまでもない。

第一章緒言、第二章石造美術の意義及種目、第三章石造美術の研究、第四章材料及製作、第五章石造美術の沿革、第六章各種目の形式及變遷、第七章主要細部の様式手法、第八章石大工、第九章刻銘、第十章石造美術の保存

の十章目から成立するが、就中、第四章、第七、九章は新に加へられたものであるだけに、著者今回の出版が、此の部分に世に問はんとされたものである事は、勿論であらう。私は其中でも第四章と第八・九章を興味深く讀んだ。

思ふに我國の如きは石造美術のためには最も恵まれない天地である。材料としても極めて堅くしかも風には弱く御影石が殆んど唯一のものである上に、海洋國の常として國土殆んど浸潤、加ふるに雨量の極めて多き事は、石造美術の保存に最も不適當な國である。しかもかゝる天與の恩恵最も貧弱なる我國に、かくも多數の石造美術品を遺存して居る事は、全く皇威の隆替少しも無かつた事と國民の愛郷心のおかげであると思ふ。そしてそこにも國史の一美點が見出されてゐると思ふ。

石造美術そのもの、沿革、手法の變異は私の知る所でない。路